日本植物生理学会設立ならびに発会後の経過

幹事長 八 巻 敏 雄*

植物生理学の研究にたずさわる人の間で，従来の専門分野をこえて互に連絡をはかり，研究を推進するために特別な学会の設立が望まれていました．また一方，1954年パリで開かれた第8回國際植物学会の折に，International Association for Plant Physiology の設立のための準備会が開かれ，そこでわが國にも植物生理学界を代表する機関が組織されることが要望されました．

こうした機運の中で東京大学の高宮篤教授が中心となり東京大学，京都大学，大阪大学，名古屋大学の有志が相計り，種々ほん走した結果，理学・農学，農藝化学 林学・水産学・薬学などの各分野から日本植物生理学会設立のための発起人として 208名の賛同を得ることができました．そして1959年4月4日東京・本郷・学士会館に46名の発起人が参集し，第1回の発起人総会を開催し，ひきつづき発会式を擧げ，会則を定め会長に京都大学理学部芦田譲治教授を選び，別紙に述べる評議員，会計監査の選出，幹事長・幹事の指名があって日本植物生理学会の発足をみるにいたりました．

その後日本植物生理学会設立趣意書を配り，各方面に会員を募りましたところ，10月1日現在で588名の入会申し込みがあり，また話をきゝつたえて外國からも個人会員や雑誌交換の申し込みが来ている状態です．一方1959年8月にカナダのモントリオールで開かれた第9回國際植物学会には東京大学農学部の田宮博教授に本会の代表として出席していただき，本会は International Association for Plant Physiology の発会に参畫しました．なお International Association for Plant Physiology はさらに International Union of Biological Sciences. (IUBS) に参加して植物生理学に関しては勿論のこと，さらに廣く生物学一般を通じて諸外國の研究者と研究上の連絡や意見の交換などを行ない学問の発達に寄與するよう計つております．

本会はまた会の目的を達するために現在3つの主な事業を進行させております．第1が欧文誌 "Plant and Cell Physiology" の発行，第2に和文会報の発行，第3にシンポジウム開催であります．

設立経過のところで述べましたように，本会は諸外國（欧米だけでなく，アジア諸國をも主対象とします）との研究連絡，およびわが國の研究水準の表明を目的達成の一面としています．欧文誌発行はこのためのものであり，編集委員によつてわが國の植物生理学の最高水準を示す内容をもつと認められたものを掲載する方針です．これには，①会員のオリジナルな研究業績（会員によってすでに和文で発表された業績の欧文による再発表を含む），②わが國で特に発達した研究の欧文綜説等が擧げられています．また③外國会員の投稿をどう扱うかはまだ意見が一致していませんが，雑誌の質を落さない限り國内会員と同様これをも認める方針が立てられると思います．以上のような編集方針で年1巻（4號）を出し，各號は 100～ 150頁を目標として計畫しています．しかし創刊第1號は発行に特別な準備を要するため，例外として1959年の末頃になり，第2號，3號，4號を1960年のうちに発行して第1巻をおわる予定です．以後第2巻からは毎年1巻ずつを定期的に出版する方針です．

各號は会員の投稿をまつて編集するのが原則ですが，第1巻第1號だけは出版の手順上とりあえず発起人の方数十名に連絡をとり投稿を依頼して編集しました．事後になりましたが，この点御承認戴ければ幸です．第2號以後は会員の投稿をまつて編集をはじめます故，投稿規定（13頁）に従いふるつて投稿されることを期待している次第です．

欧文誌の印刷部数は各號1600部で，第1巻に限り内容の紹介をかねて國外の研究機関，研究者 600を選び，これらに発送して反響をまつ予定です．したがって多くの外國研究者の目にふれる機会が多いと思われます．なお國外への発送につき，発送希望先がありましたら重複はいといません故欧文誌編集室（13頁）まで御通知戴けましたら幸です．

和文会報の発行とシンポジウムの開催とは，本会の使命達成のために他の重要な一面であります．会報は國内会員相互の研究連絡や会の運營状況を報告する機関誌で年4回発行の予定であります．現在の経濟状態ではあまり大部のものを望むことができませんが会の発展にともない頁数を増し内容の充実を計る予定であります．

東京大学教養学部生物

シンポジウムは会員が集る唯一の機会ですので，なるべく多くの御意見を出していただき内容の充実したものとして行くつもりです．趣旨としては①各専門分野で研究されていて，見方がそれぞれで少しずつ異っているようなものをテーマとして取り上げ，廣い観点から論議されるようにする．また時には，ある分野で特に発達し問題となったものを，他の分野の人々を交えて異った視野から意見を出しあって立体的な解決を計るいとぐちとする．

第1回の開催の時期は当初本年（1959）9月を予定しておりましたが，諸般の事情，とくに会員多数が参加できる便のために変更し，来年（1960年）4月，農学会が開かれる頃，東京で開催することにいたしました．目下その準備をすすめています．

なお本会の運営に於て，通常経費のほか，創立および海外への本会の紹介(欧文誌の1カ年無償配布を含む)などの出費が加算されるため，当初の3カ年は会費だけではかなり運営に困難を感じるものと思われます．このためアジア財団より126万円の寄附をあおぎ，また現在各方面に寄附を募っております．これにつき会員の皆様の御力添えにより，本会の趣旨に賛成し，斯学振興のために，寄附をして下さるか，あるいは賛助会員となって下さる機関，会社，団体を得ることができましたら幸に存じる次第です．また御関係の機関，会社，団体などをお知らせ戴けるだけでも結構です．そしてこうした方面に幹事が説明にまいります機会をおつくり下されるか，その折にお口添え戴けましたなら，なおのこと幸に存じます．なお，「日本植物生理学会設立趣意書」「募金趣意書」などは本会事務所（京都・東京）に用意してありますから，御説明にこれを御利用下され，本会発展に御力添え下されますれば幸甚に存じます．

以上日本植物生理学会の設立迄の経緯と，発会後の経過とを簡単に御報告いたしました．今後とも本会の発展のため会員の皆様方の忌憚ない御意見と御力添をいただければ幸と存じます．（1959，10，15）

近刊予告

日本植物生理学会，欧文機関誌

„Plant and Cell Physiology" Vol. 1, No. 1

1959年12月発行予定，B5版

Editors

J. ASHIDA, N. KAMIYA, S. MITSUI

Y. SUMIKI, H. TAMIYA, Y. TOGARI

Contents

S. Miyachi: Effect of Poisons upon the Mechanism of Photosynthesis as Studied by the Pre-illumination Experiments using Carbon-14 as a Tracer.

I. Takebe, T. Yanagita: Origin of Amino Acids Constituting Cellular Protein in Germinating Conidiospores of *Aspergillus niger*.

S. Katoh: Studies on Algal Cytochrome. I. Enzymic Activities Pertaining to *Porphyra tenera* Cytochrome 553 in Cell-Free Extracts.

M. Nagao, Y. Esashi, T. Tanaka, T. Kumagi, S. Fukumoto: Effects of Photoperiod and Gibberellin on the Germination of Seeds of *Begonia evangiana* Andr.

J. Ashida, H. Nakamura: Role of Sulfur Metabolism in Copper-Resistance of Yeast.

Y. Morimura: Synchronous Culture of *Chlorella*. I. Kinetic Analysis of the Life Cycle of *Chlorella ellipsoidea* as Affected by changes of Temperature and Light Intensity.

Y. Morimura: Synceronous Culture of Changes in Content of Various Vitamines during the Course of the Algal Life Cycle.

K. Izumi: Enzymic Formation of Glutamine in Rice-Plant Seedlings.